

年間第5主日の説教

金 大烈 神父 2010年2月7日(日)

《月足らずで生まれたような私》

おはようございます。

信仰が深いか、信仰が浅いか、ご自分に対して質問される場合があると思います。

さあ、皆様は信仰が深いと思われるのでしょうか、浅いと思われるのでしょうか。2年前に、このテーマをもって私が話した事を憶えています。その時、「自分は本当に信仰が深い」と思っても、「自分は信仰が浅いです」と言うのが望ましいと、私が申し上げた事を皆様は憶えていらっしゃると思います。

その様な謙遜さを取り除いて、客観的に“信仰が篤い”か、“信仰が浅い”かを、わきまえる基準とは何でしょうか。そして、もし“浅い”と思われたら、どうすれば、信仰が“深く”なるのでしょうか。それについてまとめて話をしたいと思います。

まず、必要なものがあります。それは何でしょうか。“望み”です。皆様は今まで信仰の生活をしながら、ご自分に対して、「私にとって、信仰って何だろう」、「私は信仰がある者か」、「毎日祈って、日曜日を守りながら、ミサに与っているけれども、本当に信仰というものが、自分の人生にどの位、影響しているのか」、と思われた事はあると思います。

さあ、皆様、何が一番、優先的に必要でしょうか。それは“望み”です。「望ましい信仰者になりたい」、「信仰の味を味わいたい」、「信仰の深さを体験したい」という望みが無ければ、私達には他のものは意味がありません。毎週規則的に、教会に通っていても、その望みが無ければ、私達は得るべきものを得られないのです。

二番目に必要な事はなんでしょうか。“体験”です。何の体験でしょうか。私達が1日を過ごして、その中に起こる全ての出来事の体験です。同じ体験をしても、ある人はその中で、神様のみ旨を問います。「この事は、神様が私にこの様にして欲しいとおっしゃる事だ」と思いながら、信仰的に進んでいきます。しかし、同じ事にぶつかっても、その中にある神様のみ旨を、全然見いだせずに過ぎてしまう場合があります。

“体験”は必要です。祈りによって、そして奉仕の生活を通して、時には、悲しい事にぶつかった時、困った事にぶつかった時、嬉しい事にぶつかった時、あらゆる全ての事に、私達は“ただ過ぎてしまう体験”ではなく、“思い出として心に置く体験”ではなく、“全ての事には、私におっしゃる神様のみ旨があるのだろう”と思いながら耳を傾けようとする、目を注ごうとする、その努力が何よりも必要ではないか思います。それによって、信仰的な体験が段々大きくなります。

さあ、「私は信仰が薄い者だ」とわきまえる基準は何でしょうか。ご自分が“神様を望んでいるかどうか”を振り返ってみて下さい。何か困った時、何か難しい事に覆われた時、その中で、私達は何かを決定しなければなりません。その時、社会的な価値観や、信仰的な価値観がぶつかります。葛藤も

生じます。どうすればよいか。時には自分では好まない事が信仰的に要求されるかも知れません。しかし、結果的に「あなたのみ旨に従います」としながら、信仰の道を歩んだ方は、“信仰がある”と言えます。

しかし、私達はよく負けます。負けないで下さい。今日の福音（ルカ 5・1-11）で、漁師であった弟子達に、イエス様が現れます。そして色々なお話をされてから、『沖に船を漕ぎだして網を降ろし、漁をなさい』と命じられました。しかし、シモン・ペトロは反射的に反発します。「先生、私達は夜通し苦労しましたが何も捕れませんでした」と答えた心には、自分は専門家です、少なくとも魚を捕る事にかけては、誰にも負けません。しかし、漁について何も知らない者が来て、『あそこに、網を降ろしなさい』という事に私達が従順に従う事は普通でしょうか。簡単な事でしょうか という思いがあったと思います。しかし、シモン・ペトロは「お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」と従います。そして結果的に網が破れそうになる位沢山の魚が捕れ、船が沈みそうになった、と今日の福音に書かれています。

そういうことなのです。私達もこの様な事はよくあります。皆様は、ご自分なりに、「これは、私は譲りたくない」、「これは、私の得意とするものだ」、「これは自信がある」、「自慢できるものだ」というものを持っておられるでしょう。その時、イエス様が『それは間違いだ、逆に行きなさい』とおっしゃられたら、皆様は自然に、当たり前葛藤します。その時、私達が選ばなければならない事は、「はい、お言葉なら」、「はい、み旨なら」と無条件に自分を委ねながら「付いて行きます」というのが信仰ではないでしょうか。

皆様、今日の様な事は結構あると思います。お互いに人と人との関わりの中で、この様な事はよくあります。自分が得意だと思った時には、やはり他の人を“見下ろす”傾向があります。“見下ろそう”とする傾きがあります。他の人が皆様に近づいて、まじめにその様な話した時に、「何を言っているのだ」とその人を軽んじてしまう心が、私達の中にはあります。私の中にも沢山あります。そういう事を乗り越えなければなりません。私達は神様の前では皆、弱虫です。ある意味で何も分からない者たちです。

今日の第2朗読（1コリント 15・1-11）で、使徒パウロはこの様な表現をします。「月足らずで生まれた様な私」。使徒パウロはどの様な人物でしょうか。人間的に色々な才能を持っていて、また自分をその才能に騙されて、ものすごく傲慢な者でした。誰にも負けない位の才能を持っていた者でした。しかし、彼が神様に会ってから、その口から、いつも自慢ばかりしたその口から、出された表現は「月足らずで生まれた様な私」。

皆様、信仰の一つの実り、それは“謙遜な心”です。もう一度ご自分の事を振り返ってみながら、「私はどれ位信仰的な生き方をしているか」を考えてみましょう。

ありがとうございました。

